

品川正治先生の講演から

秋葉区九条の会

1, 一身二生の人生

最初の22年 大日本帝国憲法の下で天皇陛下の赤子として生きてきた。

その後の63年 日本国憲法の下で一人の主権者として生きてきた。

2, 私の三高時代、それは戦時であった。

- ・ 徴兵免除がなくなり、いつ招集され、いつ戦地に行き、死ぬか分からない。それまでの間に「自分は何をすべきか」全員の学生がそれを持っていた。
- ・ 教師はこれが学生にとって最後の授業になるかも知れない自分の授業を聴いてもらったお礼ということで、終わると深々と「礼」をされた。
- ・ やがて、学校も授業を止めて、学生の要望のある講師を呼んで講演をしてもらった。三好達治氏は5日間の講義の後、号泣した。
- ・ 自分はカントの実践理性批判を二ヶ月間の文法の勉強の後、原文で読んだ。
- ・ 読み終えて10日後に召集令状がきた。

3, 入隊後

- ・ 入隊して1時間後、私達は整列させられ、連隊長は連隊の前で「この兵隊達は全員死ぬ予定だ。

この兵隊達を殴ったりしたら即座に俺が処分する」

- ・ 入隊2週間後、北支に派遣された。そこは中国共産党の最前線、毎日戦闘。そこで、迫撃砲の直撃を受け現在でも破片が右足に残っていて、足が不自由だ。

4, 60年間、話すことができない戦争体験、その理由

(1) 信じがたい程惨めな戦争

- ・ 熱帯雨林の部隊 気力も体力もなく部隊から離れたものは「戦死」とされた。戦死の7割以上は「餓死」だ。
- ・ 南方の島々の部隊 玉砕しか道はなかった。

こういう人の中にも生き残った人がいる。この人の前で「あなただけどうして助かったの？」と聞かれれば黙ってしまうしかない。この人達のことを思えば自分の話など到底できない。

(2) 近くの壕の中で戦友が「やられたーっ」と言ったが助けてやれなかった。

(3) 戦後同じ壕にいた戦友の母が尋ねてきて、息子の話をしてくれと言われたが面を上げることもできなかった。

5, トラウマの溶解

昨年、松江での講演会、戦友、及びその家族が大勢尋ねてきた。そこで手をついて謝った。そうしたら全員泣き出した。トラウマは完全に消えた。今は戦争体験を話すことは義務だと思っている。

6, 戦地での1945年、8月15日

終戦でも何でもなかった。武装解除は11月20日

7, 復員(1946年)、山口県千崎港

日本国憲法草案が書かれた新聞が船の中で配られた。中隊長に読むよう命ぜられ

た。感情に訴える簡潔な文章に最初はとまどった。九条のところで一人残らず泣き出した。成文憲法で戦争放棄、陸海空軍を持たない、交戦権は認めない、そこまで書いてくれるとは・・・。これは人間の目を見た憲法だ。

8 , 忘れてはならないこと、それは国家権力を持っている人達の存在だ

彼らにとってはまさに青天の霹靂、しかし憲法を変えることは不可能、ここから解釈改憲の道を探った。自衛隊の創設、有事立法、特別措置法、イラクに自衛隊派遣等。このため、九条、特に第二項、旗はボロボロ。しかし旗竿は国民が握って離していない。俺の内閣中に取りってみせると言った安部内閣は参院選で惨敗した。

9 , 現在の戦争、これはミサイル戦

戦国時代の戦争とは訳が違う。ミサイルを使う。一般人が死ぬ。子供が死ぬ。赤ん坊が死ぬ。無実の母親が死ぬ。だから戦争はしないのでなく、できないのだ。そうやって憲法九条は守ってきた。

10 . 日本国憲法、それは偶然生まれた天からの授かり物、世界の宝

東西冷戦、朝鮮戦争がもう少し早まっていればこの憲法は生まれなかったろう。そう言う意味で偶然。日本という大国が世界でただ一つこういう憲法を持っている、これは世界にとってもかけがえのない一つの宝だ。

11 , これからの日本

戦争を国家の目で見れば「自衛権があるのは当たり前だ、戦争は必要悪だ、相手が悪いことをしたときどうする」となる。国際会議では議長が「国際平和のため」という前言葉をつけた挨拶をする。それでいながら「あいつをやっつける」という格好になる。だが、戦争をしないというこの一線だけは譲ってはならないというのが日本のあり方でなければならない。

12 , もう一つの重要事項、それは「人間の目を見た経済」という座標軸

戦争を人間の目で見ている憲法を持っている日本が世界に先駆けて経済を人間の目で見ると、そう言う国になるべきではないか。経済人はそのために努力をしなければならない。

13 , 現実の経済とこれから。

現実人間の目どころか国家の目でさえみれない。金融資本の目でしか見れないシステムがグローバル化と称して広まっていった。国家でさえ攪乱されてしまった。現在ようやくG20等で規制を取り戻そうとしている。アメリカ型の資本主義は完全に挫折した。日本では小泉、竹中という取り合わせがとんでもないことをやった。その根底にあるのは「アメリカと日本は価値観を共有している」とする考え方だ。原爆を落とした唯一の国はアメリカ、落とされた唯一の国は日本、当然、価値観は違ってくる。日本の資本主義は成長の果実は資本家のためでなく、みんなに分けるのが基本だ。はっきりと「価値観は違いますよ」と言いきってしまえば日本のやり方は出てくる。しかし、「お上頼み」では駄目だ。トヨタの社長と販売店の従業員では力は10万：1くらいの差はあるが、国民投票、総選挙となれば話は別だ。1:1で勝負できる。ここでノーと言ってしまうとアメリカは世界戦略を変えざるを得ない。そうすれば世界史が変わる。皆さんは世界史を変える立場に立っているということを強く自覚してもらいたい。「どうしようもない」と諦めてしまうような問題では全くないのだ。日本の進路は皆さんが握っている。 以上